自己愛に及ぼす顕在的・潜在的自尊心の不一致の影響

不一致の大きさと方向に着目して

○藤井勉^{1,4}・澤海崇文^{2,4}・相川充^{3,4}

(¹College of Humanities, Sungshin Women's University・²神奈川大学人間科学部・³筑波大学大学院人間総合科学研究科

⁴NPO 法人教育テスト研究センター (CRET))

キーワード：顕在的・潜在的自尊心，不一致の大きさと方向，自己愛

The effect of explicit/implicit self-esteem discrepancy on narcissism: Re-analyses with the size and direction of the discrepancy

Tsutomu FUJII^{1,4}, Takafumi SAWAUMI^{2,4}, and Atsushi AIKAWA^{3,4}

(¹College of Humanities, Sungshin Women's Univ., ²Faculty of Human Sciences, Kanagawa Univ.

³Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Univ. of Tsukuba, ⁴Center for Research on Educational Testing (CRET))

Key Words: explicit/implicit self-esteem, size and direction of the self-esteem discrepancy, narcissism

目 的

Implicit Association Test (Greenwald, McGhee & Schwartz, 1998; 以下 IAT) が開発されて以降、種々の態度や特性を測定する試みが盛んである。特に近年は顕在的・潜在的自尊心 (Explicit/Implicit Self-Esteem; 以下 ESE・ISE) について、両者の不一致に焦点を当てた検討も行われている。例えば Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll (2003) は ESE が高い者の中に、ISE も高い安定的なタイプと、ISE は低い防衛的なタイプの 2 種類が存在すると述べた。一方、Schröder-Abé, Rudolph, & Schütz (2007) は、低 ESE・高 ISE のパターンを“傷ついた”SE と呼び、防衛的なタイプのみならず、傷ついた SE のタイプも神経質さや日々の不健康度が高いことを示した。

従来の研究の枠組みでは、ESE と ISE の不一致の“大きさ”や不一致の“方向”については検討されていなかった。しかし近年、Creemers, Scholte, Engels, Prinstein, & Wiers (2013) は、この点に着目して研究を行い、ESE に比して ISE が高い場合、ESE との不一致が大きいか (i.e., ESE が低いほど) 抑うつや自殺念慮、孤独感といったネガティブ指標の得点が高いという結果を報告した。

本邦において ESE・ISE の不一致の大きさや方向という観点から検討を行った研究は市川・村上・望月 (2014) の他にはみられず、知見の蓄積が必要である。そこで本研究では、自己愛と ESE・ISE の関連を検討した藤井・澤海・相川 (2014) のデータを ESE・ISE の不一致の大きさや方向という観点から再分析し、結果を報告する。仮説は下記のとおりである。

仮説 Creemers et al. (2013) より、ESE に比して ISE が優位である場合、不一致が大きいかほど自己愛が高いだろう。

方 法

参加者 東京都内の大学に通う大学生 77 名 (男性 42 名、女性 35 名。平均年齢 19.92 歳, $SD = 1.25$ 歳) を対象とした。

材料 (a) SE-IAT 参加者の ISE を測定するために使用した。(b) SE 尺度 ESE の指標として Rosenberg (1965) の尺度 (10 項目) を用いた。(c) 自己愛人格目録 自己愛の指標として小塩 (1998) の NPI-S (30 項目) を用いた。(b), (c) は 5 件法 (1: あてはまらない-5: あてはまる) で回答を求めた。

手続き PC が一名につき一台設置されている教室を使用し、集団で実施した。参加者に実験への参加は任意であり、実験に参加しないことによる不利益はないこと、申し出ればいつでも実験を終了できることを事前に伝えて同意を得たのち、SE-IAT と顕在的測定を実施した。最後にデブリーフィングを行い、実験を終了した。所要時間は 20 分程度であった。

結果 および 考察

データの得点化 顕在的測定は逆転項目を逆転し合算平均得点を求め、SE-IAT は Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) による D 得点を求めた。得点が高いほどその尺度名の傾向が強い。

ESE・ISE の不一致の影響の検討 Creemers et al. (2013) と同様、ESE と ISE の得点を標準化して差を求め、その絶対値を算出した。次に ESE が優位であれば 0、ISE が優位であれば 1 として、不一致の方向のダミー変数を作成した。続いて、自己愛の各下位尺度 (優越感・有能感、賞賛・承認欲求、自己主張性) の得点を従属変数として、step1 で ESE・ISE の不一致の大きさと方向を投入し、step2 で両者の交互作用項を投入する階層的重回帰分析を行った。

まず優越感・有能感は step1 で投入した不一致の方向の影響が有意であり ($b^* = -.266, SE = .154, p = .019$)、ISE が優位であるほど優越感・有能感が低かった。また、step2 で投入した交互作用項の影響も有意であり ($b^* = -.293, SE = .182, p = .007$)、単純傾斜の検定の結果、ISE が優位である場合、不一致が大きいかほど優越感・有能感は低かった ($b^* = -.449, t = 2.975, p = .004$)。紙幅の都合から、この結果のみ Figure1 に示す。

次に、賞賛・承認欲求は step2 で投入した交互作用項の影響のみ有意であり ($b^* = -.324, SE = .218, p = .005$)、単純傾斜の検定の結果、ESE が優位である場合、不一致が大きいかほど賞賛・承認欲求は高かった ($b^* = .358, t = 2.291, p = .025$)。

また自己主張性は step2 で投入した交互作用項の影響のみ有意であり ($b^* = -.255, SE = .169, p = .021$)、単純傾斜の検定の結果、ISE が優位である場合、不一致が大きいかほど自己主張性は低かった ($b^* = -.458, t = 2.972, p = .004$)。

Figure1 不一致の大きさと方向による優越感・有能感の予測結果

自己愛を対象とした分析の結果、優越感・有能感や自己主張性において仮説とは逆の方向の交互作用がみられた。NPI-S で測定される自己愛は対人恐怖的な側面を含んでおらず、SE とも正の相関がしばしば報告されることから、誇大なポジティブさを示すものとも解釈しうる。この自己愛をポジティブな指標と捉えるならば、本研究の結果は Creemers et al. (2013) の結果と矛盾しないとも考えられる。本研究は探索的に藤井他 (2014) のデータを再分析したが、今後は新たな指標 (抑うつや幸福感など) を収集して検討を重ねる必要があるだろう。